

『東方』二七九号より

戴季陶の政治思想と

日本研究の再評価

鑑屋 一（目白大学）

戴季陶は若くして日本に留学し『日本論』を著した希代の知日家である。長年孫文の側近として秘書兼通訳を務め、孫文晩年の「大アジア主義」講演の通訳も彼が担当した。戴季陶は孫文思想の代弁者として孫文死後の国民党を支えた理論家であり、国民党の純化と反共を説く所説は「戴季陶主義」として知られる。その反共の主張とそれが蒋介石の反共政策の理論的な基礎となったことにより、戴季陶に対する評価は否定的なものであった。近年、中国における政治的環境の変化にともない、資料状況も整備され、しだいに研究が蓄積されつつある。本書は「中国革命」と「対日観」との内的関係の解明を目的とした最新の戴季陶研究である。

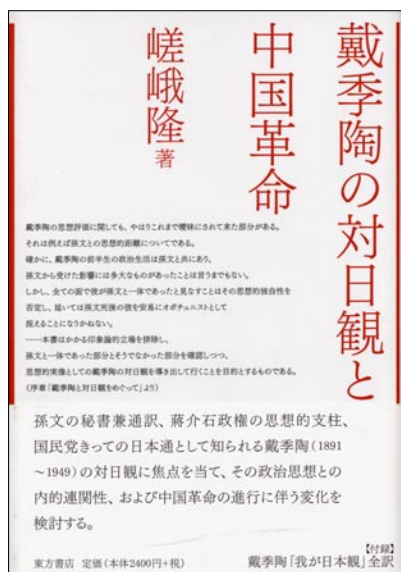
本書の構成と内容は次のとおり。

「序章 戴季陶と対日観をめぐって」では目的と方法が述べられる。本書の目的は「戴季陶の対日観に焦点を当て、その思想全体の中に占める『日本』の位置づけを探ると同時に、近代以降における日中関係の一つの側面を明らかにしようとする」ことにある。従来、戴季陶への関心は主に①戴季陶主義と②日本理解に置かれ、「反共」を反動的、「日本分析」を卓越したものとする分裂したイメージで捉えられてきたが、戴季陶の「対日観」は現実の政治課題に関わる「思想傾向」の一部として見るべきであり、両者

嵯峨隆著

『戴季陶の対日観と中国革命』

四六判・二二六頁・東方書店・二、五二〇円



の内的関連を前提とした観点からの再検討が必要である。また戴季陶の「思想の実像」を捉えるにはこれまで曖昧にされてきた孫文との思想的距離を実証的に解明する作業が必要となる。本書では①孫文の秘書である初期、②マルクス主義受容の五四時期、③孫文死後の国民革命時期、④満州事変以後の各時期における「思想傾向」と「対日観」を分析する。

「第一章 初期の活動と対日観」。「第一節 中華民国成立前後の言説」では青年期の戴季陶と日本との関わりが検討される。十一歳で日本語の学習をはじめ東京留学を経て「天仇」の筆名で活躍する新聞記者戴季陶は、日本に対し批判的な見解を持ち、狡猾、狂暴、卑屈を「日本人の気質」と見、日韓併合に日本の中国侵略の可能性を予見する。やがて孫文の通訳として訪日、ロシアに対抗するための日中提携論を説くにいたる。

- ▼ 『東方』279号より
一 戴季陶の政治思想と日本研究の再評価
▲ 鑑屋 一

「第二節 日本亡命と対日観」では「第二革命」後の日本亡命以降を対象とする。戴季陶の関心は日本隆盛の最大要因である「固有の国民的精神」にあった。「対日観」では孫文の対日提携策に歩調を合わせたが、日本の青島占領に危機感を抱いてから、その侵略性を批判する。

「第二章 五四時期の思想と対日観」。「第一節 『社会主義者』戴季陶の登場」ではマルクス主義の問題について考察する。戴季陶はマルクス主義に依拠し中国社会を分析しカウツキーを翻訳したが、「階級調和型」の社会主義を嗜好し、国内の混乱と外国の干渉を招く「社会革命」を危険視した。やがて「ロシアを起点とする社会革命の世界的波及は必至である」と説くが、中国の労働者の「階級的自覚」を求めるにとどまった。

「第二節 『我が日本観』とその周辺」では「対日観」として重要な「我が日本観」の内容分析がなされる。この論考の特徴は「日本の歴史的・文化的背景の分析」を重視する点にあり、「武士階級」の道徳・精神に大きな関心が払われている。戴季陶は日本のアジア侵略も歴史的文化的特性に由来すると見、日本の政治構造のマルクス主義による変革を期待したが、帝国主義との対決、労働運動による変革に参与する意識が欠けていた。

「第三章 第一次国共合作時期の戴季陶」。「第一節 第一次国共合作に至るまで」では一九二〇年代前半を対象としている。自殺未遂以後一時一線を退いた戴季陶は「国民党の組織純化と排他的指導性の維持」を重視する立場から、国民党改組および容共策には消極的であったが、孫文に従い容共的政策を容認した。

「第二節 孫文『大アジア主義講演』時期の言説」では北上する孫文に同行した訪日中の言動が検討される。戴季

トッページにもどる

陶は儒教の概念を用いた独特な孫文思想の解釈を行なうなど後の思想の特徴を示している。「対日観」では孫文のそれを踏襲し、日本がアジアに対し「仁者」の政策を採り、独ソと連携し反英「大陸同盟」の一員となることを期待している。

「第三節 『戴季陶主義』形成の中での反帝国主義」では孫文死後の戴季陶の言動が分析される。戴季陶は国民の精神的統一を重視し儒家思想の延長で孫文思想の絶対化をはかっている。中国革命について「仁愛」を「革命道徳の基礎」とする「階級調和論」を説くが、「対外観」に劇的変化はなく、英帝国主義を主要敵とみなし、中国革命を世界的な反帝国主義運動に位置づけ「民族国際」を提唱し日本の参加を求めた。

「第四章 国民革命時期の対日観」。「第一節 『日本論』執筆の背景」では中国国民党の変容と戴季陶の立場について検討する。対中国積極介入政策を推進する田中内閣は「中国革命の妨害者」となり、かくして孫文の日中提携論は失効した。国民党の二元的統一を重視する戴季陶は蒋介石の反共クーデターを支持する。

「第二節 『我が日本観』から『日本論』へ」では『日本論』前半の内容分析がなされる。前半十四章は「我が日本観」を使用しており、修正箇所の比較対照により「対日観」の変化を観察する。封建時代の分析が厚みを増し、武士道と明治維新に多大な関心を払い、「維新の内発的要因」として「日本人の精神的蓄積」を指摘し、国民革命を遂行する国民党の三民主義と関連づけて論じている。

「第三節 『日本論』の中の中国革命論」では後半十章が検討される。「中国革命達成のために日本に学ぶべき」は「その精神的側面」であるとする戴季陶は、日本人の「儀

「犠牲的精神」を称賛し、中国人に「主義」を実現する軍事力についての「正しい理解」および「尚武」の精神と民族の「自信力」の涵養を要求している。日中提携論の桂太郎を高く評価する一方、田中義一をもって日本の「武士道精神」の腐敗とみる戴季陶にとつて『日本論』は日本への「最終的な絶望の表明」であった。

「終章 満州事変と戴季陶」では事変後の「対日観」が検討される。特殊外交委員長となった戴季陶は日本の侵略政策を批判し、国際連盟を利用した問題解決を提示した。内政の安定を重視し建国精神に基づく一致団結を強調する戴季陶の主張を、蒋介石の対日方針（安内攘外）と同じ「不抵抗主義」とみるのは「一面的」である。戴季陶は日本に対し「一抹の愛着」を抱いていたが、現実の日本は不倶戴天の「仇」でありつづけた。

さて本書に対する講評であるが、戴季陶の「対日観」を分析するのであれば、①戴季陶の思想にとって日本研究のもつ意味を評価する軸、②中国人の日本研究の系譜上における戴季陶の位置を評価する軸の二本の座標軸が必要であろうと考える。

本書の基本的な接近法は①であり、著者が劉師培や呉稚暉など他の人物研究で見せた精細さでテキストの内面的な解説がなされている。孫文との距離を測りながら戴季陶の位置を確定しようとしている点は方法として有効である。本書は多くの先行研究を踏まえて執筆されているが、随所で述べられる論述の斬新さや大胆さは、研究史を回顧することにより明確にできたであろうし、戴季陶を客体化する視点も浮き彫りにできたであろう。

満州事変後の蒋介石の安内攘外策に対する戴の支持が「不抵抗主義」以上のものであり、国民党内の思想統一と

▶ トップページにもどる

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

「合作」に対する危機感を重視すべきであると見るのは卓見であるが、戴の「合作」に対する猜疑心と危機感を方法的に抽出することにより、国共両党の協力提携の体系ではなく相互不信の体系として「合作」の原理と歴史を記述する視点が獲得できたのではないだろうか。

本書では②の中国人の手になる日本論の系譜上の位置については関心の対象から外されている。少年期の日本語学習から日本に接近した戴季陶には日本に対する情緒的な共感があつたであろう。「我が日本観」執筆の動機のひとつに中国人の日本研究の貧しさに対する反発があつたことについては、もう少し繊細な分析と評価が必要だと考える。中国にとつて日本は近代化の（正負両面の）教科書であり、清末の改良論以来、中国の民族性と近代化とを如何に調和させるかは政治思想家達の踏み絵となる問題であり、かつ戴季陶も「親日」と「反日」との間で葛藤を覚えたことれば、その切断面から日本研究のひとつの類型を抽出することも日本人の視点で書かれた本書の役割であつてもよかったのではないだろうか。

とはいえ、戴季陶の論説を時系列に沿い丹念にパラフレーズした本書は原典的な戴季陶研究文献として今後の戴季陶研究が参照すべき研究書であることは間違いない。付録の「我が日本観」は読みやすい訳文である。労作の「戴季陶略年譜」および「主要参考文献」とともに戴季陶研究に裨益するところ大であろう。